

khien とは漢語ならぬ胡語を音寫したものであるといふかも知れないが、自分は當時胡と稱せられ得る民族の語に、天を khien と呼んだものゝあるのを知らないし、また「胡謂神爲祆」の解釋は、その由來甚だ疑ふべく、之を以て一個の臆斷に過ぎぬ⁽¹⁾と信ずるから、かゝる見解には従ひ得ない。

要するに祆とは西域の天神を表はす爲に作られた文字で、その音 khien は天 t'ien の方音に過ぎ、此の教の先づ入り、且つ行はれた關中の或地方や西方人の支那に來たものなどが、正しくは t'ien ム音すべきを khien と發音したが爲に、新造の此の字に對して khien の音を附する」となり、かくて t'ien, khien の兩音を傳へらるゝに至つたものに外ならぬと考へる。

史記や兩漢書の記事中に殘される僅少の匈奴語が其の種族の何であつたかを決定する問題に於て重要な標幟とせられ、今日まで内外の學者に依りて屢々論議せられたことは、今更めて説くまでもない事である。此等の匈奴語中に祁連といふ語があつて、史記の匈奴傳以下の諸書に記され、山名として今日まで傳はつて居る。前漢書武帝本紀天漢二年五月の條に見ゆる天山に附したる顏師古の註には、「卽祁連山也、匈奴謂天爲祁連、祁音巨夷反、今鮮卑語尙然」と見え、また同書霍去病傳の祁連山には同じ人の祁連山卽天山也、匈奴呼天爲祁連、祁音士夷反」の註が見える。かく祁に與へられたる音に、巨夷反 ki と士夷反 si との兩様があるが、之を以て何れかの一方が誤であるとは云はれない。實際上同時代に「祁」に ki と si との兩音の存すること、例へば「支」に於ると同様であつたので、かゝる兩種の音註の生じたものに外ならぬであらう。尤も祁連が一つの匈奴語を音寫したものと解く